Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-09-10

近世本草書類における鱸魚について

島田, 勇雄

(Citation)
国文神戸,創刊号:52-63

(Issue Date)
1968-06

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481937

近世本草書類における鱸魚について

島田勇雄

晋書の張翰伝に、翰が都城に出て志を得、顕官となったが、ある日秋風の起こるのを見て郷里の鱸魚の鱠を想起し、人生は貴い、たまたま志を得たとて何の価値が有ろうぞ、と官を捨てて郷里に帰った、という故事がある。鱸魚の美味を語る話の一つになっている。また烟花記に、呉都が松江の鱸魚を献上したところ、煬帝が東南の佳味なりと言ったという話がある。爾来鱸魚は松江のそれを最良の絶品とする。ところで、その松江をわが鳥取県の松江市に仕立て、その松江市のスズキをわが国の最良の佳品とする俗説がある。ちょっとした洒落であるわい、と思っていたところ、わが近世後期最大の本草学者小野蘭山が、本草綱目の講義で、世にもくしき偶然の一致なり、と感嘆しているのを見て、驚きいってしまった①。

古事記の昔以来わが国では鱸魚をスズキと訓じてきた。この魚名になぜそのような和訓を与えるようになったのか、よく分らない。とにかく昔から今に至るまで、これをスズキと読むことにほとんど疑いがさしはさまれなかった。中国の本草書が伝来し、この魚の中国における魚類学的性格が明らかにされても、なお疑うことを知らなかった。全く迂闊な話である。

わが近世の本草学は明の李時珍の本草綱目によって開眼した。それ以前が証類本草の時代である。この両者の相違は、証類本草が薬学的記述を主とするものであるのに対し、本草綱目が博物学的記述をかなり重要視し、そのことがわが近世に深い影響を与えた点にある。証類本草の巻二一の「虫魚中品」の鱸魚の項には薬学的記述のみあって、博物学的記述はない。本草綱目では巻四四の魚類（有鱗魚の意味）に鱸魚があり、その集解に中国におけるこの魚の博物学的解説として次の事が挙げてある（若水本による）。

時珍曰鱸出二呉中一淞江尤盛四五月方出長僅数寸状微似レ鱖而色白有二黒点一巨口細鱗有二四鰓一楊誠斎詩頗尽二其状一云鱸出二鱸郷一芦葉前垂紅亭下不レ論レ銭買来玉尺如二何短一鋳二出銀梭一直是円白質黒章三四点細鱗巨口一双鮮春風已有真風味想得ニ秋風一更迴然南都記云呉人献二淞江鱸鱠於隋煬帝一帝曰金虀玉鱠東南佳味也

右の時珍の解説によれば、鱸は呉の淞江の産がすぐれており、ち

ょうど四五月頃に出る。長さは数寸、色が白く、黒い斑点があり、口が大きく、鱗は小さく、えらぶたが四枚ある、ということである。もっとも四鰓のあるのは長橋の南に所出するもののみで、他は三鰓であるという。② 四鰓とはえらぶたに四条の紅黄色のしわのできていることを言うのである。ところで右の解説をわがスズキに充ててみるに、体長・四鰓など若干適合しないものもあるが、類似点も多く③、魚類学的性格についての知見に乏しい時期にそのような解釈におちいったとしても、あえてとがめだてのできにくい点もある。更にまた時珍はそのことに注意していないが、わがスズキに該当すると思われる鱸魚も中国にあったらしいことからすれば、一層そのように思われる。今はただ、わが近世の本草学者が、どのような学問的な流れの中で、いつ、どのようにして、その異質性に留意するに至ったか、ということに焦点をおいて、その研究史をたどってみたいのである。

本草綱目輸入直前の、証類本草時代の中世的本草学を代表する医学者は曲直瀬道三であり、彼に能毒・本草異名記・宜禁本草の三部作があり、そのうち宜禁本草にのみ魚類についての記述がある。その下巻で「鱸魚」に「スゞキ」と付訓し、証類本草にもとづく薬学的記述を行なってい、更に「宜禁追加三段」中の「虫魚類」の「中」に「鱸（スゝキ）」と載せている。「中」とは食療品としての中品の意で、上品・中品・下品は周礼の食医以来の伝統的分類法であり、彼は鱸魚を中品とする証類本草の説に従順に従ったのである。道三の子玄朔は、父道三の「能毒」を慶長十三年に改編したさい、その前年に始めて舶載せられた本草綱目を参看した旨をその跋文に書いている。この書に接し、新しい方法論をかいまみたわけであるが、その「能毒」には綱目の影響は現れていない。しかしいち早く新渡来の好著を吸収しようとつとめた形跡はその著「日用食性」にとどめている。この書の初版は慶長十八年で、綱目輸入後六年めのことにて多くを望むのはむりであろうが、寛永十九年版によれば、その「食性目録」の項の「鱸魚（スゝキ）」に本草綱目にもとづく薬学的記述をしてい、その他「日用食性」の項の「上品」の部に一例、「諸疾宜禁集」の項に五例（二例は付訓なし）あってそれぞれスゝキと訓じている。しかしスゝキと訓じることに疑いをはさむまでには全然到っていない。

啓蒙時代によく見られるように、本草の要旨を和歌の形式にして記憶に便ならしめる書が行なわれた。本草歌（宜禁本草集要歌、編者・刊年不明、七巻）・和歌食物本草（編者不明、寛永七年刊、二巻）（山岡元隣増補、寛文七年刊、七巻）・本草和歌能毒（新編和歌能毒、編者・刊年不明、二巻）などがそれである。本草歌には「鱸（スゝキ）」・「すゞき」の語が載り、和歌食物本草（二巻本）には「鱸（すゞき）」・「すゞき」の語が載り、本草和歌能毒には魚類は載らない。これらの書は薬功のみを述べ、それも証類本草系とも本草綱目系とも定かでないが、和歌能毒は前者系であるらしい。

本草綱目を始めて入手したのは林道春で、慶長十二年のことである。道春はこれによって本草綱目序註（寛文六年刊）・新刊多識篇（慶長十七年成稿、寛永八年刊、五巻）を著わした。後者は主として本草綱目の術語を選出し、これに和訓をほどこしたものであるが、和訓の選定にあたっては、古辞書などに通用するものをあてることが多く、誤訓とすべきものが多かったが、しばらくは道春の儒教的

声誉の故に準拠すべき書とされた。「鱸魚」も通用のごとく「須々岐」と和訓を添えてある。多識篇は博物学的分類にしたがって術語を分類してあるが、のちこれを改編していろは順にした本草薬名備考（編者不明、延宝九年刊、九巻）や本草綱目指南（編者不明、元禄年間刊、六巻）は、多識篇の和訓をそのまま踏襲している。

近世における百科辞書の嚆矢とすべきものに訓蒙図彙（中村惕斎、寛文六年刊、二〇巻）がある。図解を中心にした百科辞書で、本草的知識をかなりよく消化してとり入れている。この書の「龍魚」の部に、「鱸　すゞき　一名四鰓魚」があり、わがスズキとおぼしき魚図が載っている。これが当時の一級的水準にある儒者の、この魚についての常識水準を示すものであったろう。

ところで、寛文の頃には中国の医薬書・本草書類の輸入・和刻も著しく多きを加え、わが国の学的水準も次第に高度になり、邦人の著書も徐々に数を増していく。始めは中国書の模倣・転載にすぎないものが多かったが、次第に独自の見解を加えていくようになり、ついには中国書を超克しようとの姿勢を明らかにするものまでもが現われるようになる。

名古屋玄医の閲甫食物本草（寛文九年自序、寛文十一年刊、二巻）は、わが国人の手になる食物本草としては最初の著で、呉瑞の日用本草や李東垣の食物本草の影響のもとに成立したものではあるが、いたずらに中国書の追随に終るのをいさぎよしとせず、親視実検の姿勢から、わが国産の食品について記述するのを意図している。それは彼が、観念論的な病理論を排して実検的な古医方を提案した人であったことにもよるのである。

鱸魚がわがスズキとは別物なることを正しく、認識しているのは、実にお見事というほかはない。次代の学者がいつまでもまた逆もどりするのであるから、一層賞讃せざるを得ない。その見出し語に「寸寸幾」とし、閲甫独自の主治を述べたあとで、和名鈔・多識篇に鱸をススキと訓じているがと、本草綱目の説を引用して、これより考えれば鱸魚はスズキではありえない、と述べ、俗間に「保天」と呼ぶものであろうと代案を提出している。判別の基準として状と性味とを挙げているが、その状の中に何が含まれるか明らかでない。彼のばあい淡水産・海産の別までは思い及んでいないように思われる。

江戸はまだ医学的水準が高くはなかったようである。そのような中で新井玄圭やのちの野必大のごとき著者の現われたことは注目すべきである。新井玄圭は武門より杏林に転じた人で、食物摘要（諸家食物摘要大全、天和三年刊、八巻）と食物本草（食物本草大成、元禄七年刊、八巻）とがあるが、両者同版の由である。手もとの食物本草の資料によれば、中国本草書に載る魚類五十種のうち疑いなきもの四十二種を選出したとある。批判的ではあっても中国本草書中心の選出法、ほとんど中国本草書の転載に終止する薬学的解説などと、いずれも閲甫より一歩後退の感がある。ただ附録の和産魚の項は模倣すべきものを持たないため、かえって博物学的記述を中心にするなど独自のものが出ている。「鱸魚」は通説のごとくススキと訓じ、本草綱目にもとづく薬学的記述をあげている。早くも逆もどり、であるし、ある意味では、江戸の学的水準を示すものでもある。

備用庖厨和名本草（向井元升、寛文十二年成稿、貞享元年刊、十三巻）は、加賀侯前田綱紀の委嘱によって成ったもので、博物学的記

述を中心とするもので、従来の書が薬学的記述を中心とするものであることに想到すれば、大きく前進した好著というべきであろう。元升は肥前の人であるが、壮年以後は京都に住み医を業とした。京都学派の人と言ってよかろう。京都には稲生若水がいて、本草学の中心となるのであるが、若水は物産学・名物学の色彩をひときわ濃くするが、そのような傾向は早くも現われつつあったのである。

庖厨本草の構成は、鱗類・無鱗類の二分類法、魚名の配列順など本草綱目を宗とするものである。ただその解説は、綱目が従来の薬学的記述中心主義を改めてより博物学的色彩を濃くしたものであったのに対し、これは博物学的記述を中心にするという点で綱目を一歩進めたものであった。鱸魚については、本朝先輩が長さ数寸という点からアユに充てるのは穏当でないとして、疑ひなくスズキであるとし、筑後柳川の入江の海ざかいにいるハクラがそれで、これはスズキの類で、時珍の見た鱸魚はこれであろう、大小長短は土地によってかわるのでもあろう、とする。元升は魚の分類にも解説にも淡水産と海産との差違を軽視している。そのことが、単純に通説に従ったのではないにしても、このような結論を導くに至ったのであろう。

本朝食鑑（元禄五年成、同十年刊、十二巻）の著者野必大は、名医随祥院法印元徳の子、道春門の儒者人見竹洞の弟である。この書には祭酒林直民、泉州岸和田侯岡部長泰、兄竹洞が序文を認めている。同じく江戸の人でも、新井玄圭に比すれば、所説は遙かに前進している。解説項目等は本草綱目に準拠するが、いたずらに盲信することを避け、実検実証を経て確信の持ちうるもののみに記述を限定すると自序にも述べている。魚類の分類も鱗類・無鱗類の二分類に加えて、河湖・江海の二分類をあげ、四分類法を取る。更に重要なのは、華和異同の項を設けて、本邦産と中華産との異同を論じる点である。邦産にして、漢産に類似点があれば、安易にそれよと決論した従来の行き方に対する反省が見られる。

鱸については「訓二須須木一」と割注し、釈名に「小者曰レ鯖」とする。これはこの魚の成長名の初出である⑤。集解に博物学的事項、産地による良否、古事記・平家物語・東鑑に載るスズキにまつわる説話を載せる。ここで始めて雲州松江のスズキのことが載る⑥。更に気味・主治・発明の項で薬学的記述を行なう。「本州鱸魚亦四鰓也」とすることを始め、観察に粗雑さがめだつ。華和異同の鱸でも、時珍の言う「松江之鱸長僅数寸是本邦之鯖也」と単純に割りきるのみか、「明流寓舜水朱氏亦見」鯖為二松江之鱸一味亦同焉」とする。兄竹洞との関係から舜水説を聞き、もって自説の傍証としたのであろうが、舜水説を正しく伝え聞いたものか疑わしい。というのは舜水には舜水朱子談綺（宝永五年刊、三巻四冊）があり、その第四冊は舜水説の聞書きによる分類体辞書をなしているが、それの鱸魚についての解説は必ずしも単純にスズキ説を容認するものではないからである⑦。

和語本草綱目（広益本草大成、元禄十一年刊、二二巻）の著者一抱子岡本為竹は都に聞えた医学者で、斯学の著書は多いが、伝統的な草根木皮は精しいが、本草学や食療的部面には弱く、魚類にはさして通じていないらしく、通説の和名を使用することが多い。本草綱目の魚名をその配列順に従って挙げ、その左右に音と和名とを添えるが、音のみを添え、またそれさえも添えないものがある。多くは和名について確信が持てなかったからであろう。その限りでは世

を誤る罪は軽く、良心的であるとさえ言えるかもしれないし、いたずらに通説になずむ者よりは前向きであると言ってもよかろう。鱸魚にはスゞキと付訓し、綱目の主治を略記してある。性状その他については全く記述がないので、京都学派で争点としたことなどについて、どれほどの認識を持っていたか一切不明に属する。

馬場幽閑の日用食性大全（日用食性和解大全・食物和解大全・保養食物大成、元禄十六年刊、三巻）は曲直瀬玄朔の「日用食性」の系列に属する啓蒙的な医薬書である。諸疾禁好物の項に「鱸（すゞき）」が六例、いろは引きの部分に「寸々幾（すゞき）」が一例載る。書の性質上、通俗的用法に従うものであるし、深い検討もされていないわけである。

近世前期最大の本草学者貝原益軒には大和本草（宝永六年刊、十六巻）等の著書がある。大和本草は、益軒が本草綱目の和刻本を刊行してより三十七年後の著作で、すでに綱目を超越して独自の境地を開拓している。綱目の分類法・記述等について多くの批判を持ち中国の典籍に捕われずに、独自の見地からわが物産について記述しようとの見地に立ちえている。益軒は元升の影響をかなり受けたらしい。鱸魚についても同様である。河鱸の項には、六七寸をセイゴ一尺内外をハクラ、とその成長名を挙げる。海魚の方では「鱸魚（スゞキ）」には、長さ・味のこと、セイコは松江（セウゴウ）の音韻変化であろうなどと日本釈名式の語源趣味をのぞかせ、本草の鱸が長さ数寸とあるのは日本のセイゴであろうと即断する。成長名等を知ったことや語源癖がかえってあだとなったわけである。益軒の説には、まま、通説を徹底的に疑えない、十分科学的になりきれないところから来る限界がちらちらするのである。筑前土産考（宝永六年序）にも河鱸、海鱸の事が載る。

訓蒙図彙の系列の百科辞書に和漢三才図会（寺島良安、正徳三年刊、一〇五巻）がある。訓蒙図彙より四十七年後の著作で、古医方派の著者の学問的姿勢は見事であり、多くの本草学の成果を吸収して見るべき点が多い。江海有鱗魚の部に「鱸（すゞき）」の項があり、「四鰓魚　和名須々木　小者名二波称一尚小者名二世伊古二一」とし、解説部分に「其三四寸者称二世比古一六七寸近レ尺者名二波称一（ニヨク）尺以上至二一二尺一者名二須受岐一（ス）諸国四時共有之雲州松江最多而夏月特賞レ之」とする。古医方の先輩、閭甫の創見を生かせなかったのは残念である。成長名にハネが始めて出る⑤。ハネは内田氏によれば、北陸・瀬戸内・山陽に使用される。

寺島良安は京都の医学者でもあり、その説には京都学派の重鎮稲生若水にもとづくものかと思われるものが多い。スズキ説もおそらくそうであろう。若水は益軒も大和本草の中でしきりに賞讃しているほどに当代きっての本草学者であり、前田綱紀の庇護を受けて庶物類纂の編纂に従事した。名物学的傾向の強い書であるが、この書の編纂を契機に諸国に物産学的研究が崩起したという点においても画期的な名著である。若水には食物伝信纂（元禄八年成、十二巻）・詩経小識（宝永六年跋、五巻）・結髪（ママ）居別集（正徳四年序、六巻）があるが、これらには記事なく若水自身の見解の変遷をたどることはできない。庶物類纂では松江府志等の地誌類を引用したのち、珍らしく若水の見解を述べている。すなわち本草綱目には「長僅数寸」とし、そのことをめぐってわが本草学者間にいくたの論争が生じていたのであった。それで後漢書左慈伝を引用し、慈が三尺余の鱸魚を釣ったとの記事があるので、中国の鱸魚はわが国の鱸魚と体長の等しいものもあり、したがって諸般の記事から鱸魚はわがスズキ

に当たるはずであり、本草綱目に「長僅数寸」とするのは、李時珍が鱸魚の実態に通ぜず、その幼魚を見てそのように記述したのであって、時珍の誤まりである、とする⑧。これは、また全く自信に満ちた言辞である。従前の本草学者が時珍の記述を金科玉条としたのに対し、彼は、たとえ時珍の記述といえども盲信せず、是々非々の姿勢をもって向う、という充実した態度を持した。近世中期にはこの程度にまで本草学の水準は高まりを見せていたのである。この若水の学殖・見識が当時の京都学派を風靡し、その学説がこの前後における門下生その他の記述に表われるのである。したがって、このような観点から主張される鱸魚スズキ説は、従前のスズキ説とは、結論は同じであっても、次元を異にするというべきであろう。

白石の東雅（享保四年成か、二〇巻）も若水と同説のことが多く鱸魚も同じく後漢書を引いて庶物類纂と同内容の事を述べている。若水の高弟松岡玄達は、若水なきあとはその後継者となり、更に将軍吉宗によって斯学の最高指導者として江戸に招聘せられたほどの学者である。その著作のうち用薬須知（享保十一年刊、五巻）はスヽキ説、薬籠本草（享保十九年、二巻）・本草綱目記聞（未刊、四巻）・本草一家言（未刊、十六巻）・詹々言（寛延三年刊、一巻）等には鱸魚の記事はない。食療正要（明和八年刊、四巻）には師に同じくスズキと訓じ、随の大業志を引いて「呉都鱸魚鱠八九月霜下時収ニ鱸三尺以下一劈作レ鱠」と三尺の鱸のことを述べ、「達曰和名ニ思思奇ニ西南海中多有レ之」とする。玄達は草木等については多くの業績を挙げているが、魚類に関してはほとんど師説に追随する程度で、師説を出ることはあまりなかったように思われる。鱸魚についても例外ではない。越後名寄（丸山玄純、宝暦六年自序、三二巻）も庶物類纂と同説のことが多いが、鱸魚についても同様である。魚類については、これを河魚と海魚とに二分し（大和本草の影響）、河魚の河鱸と海魚の鱸とに記事がある。河鱸には、「大成四五尺余有」とし、鱸には「其形大成者二三尺長円小鱗淡灰色三四寸者称ニ世比古一六七寸成者名ニ波称一尺以上須受岐云〇鯯　俗字乎小鱸」とし、魚体上の記事と成長名とを載せる。鱸魚について問題点をどれほど把握していたか明らかにしないが、成長名の記述が、三才図会と同じ点に興味が持たれる。玄達の弟子烏田智庵の両国本草も「河鱸スヽキ　鱸スヽキ」と鱸を挙げ、当時の物産書もことごとく同説を載せる。この外の学者の中にも、若水的見地に同じてスズキ説を取る者が多く見られる。たとえば江戸の本草学者栗本丹州の皇和魚譜（天保九年序、二巻）にもスズキに鱸魚をあて、図解し、食療上の事を述べたあとに、小ナルヲセイゴト云　一尺余ナルヲフツコト云　本草ニ松江鱸魚長僅数寸ト云ハ時珍ノ誤ナリ詳ニ庶物類纂ニ見エタリ」とする。江戸の成長名の記述も重要であるが、一般の学者の見ることを得なかった庶物類纂を参照の上その言説をしている点は興味を引く。

松岡玄達が官命によって江戸に下ったのは享保六年のことで、爾来徐々に江戸学派が充実を見せる。その頃の市井の医師・本草学者に神田玄泉（実名戸田立賢）がいる。玄泉以前に新井玄圭・野必大らがいて、本朝本草系の著述を持ったことについては既述した。玄泉はわが国最初の魚類専書たる日東魚譜を著述するが、これには享保四年本・同十六年本・元文六年本の三種あることを、白井光太郎博士は改訂増補日本博物学年表（昭和九年刊）に述べておられるが外に未見ながら享保二十一年本があるらしい。それぞれ若干記述に相違が見られ、玄泉が徐々に自説を更新していったあとがたどられ

る。この日東魚譜の著述過程に、本草補苴（享保四年序、八巻）・食物知新（享保十一年序、巻首・六巻）・本草大義（享保十四年序巻首・四巻）・本草図譜（享保十五年序、六巻カ）・本草或問（元文三年序、二巻）の類が著述された⑨。そのうち日東魚譜との関係からは食物知新が重要なのであろうが、これのみ未見である。

本草或問の自序に貝益軒・稲若水・松玄達の名を挙げ、「玉則玉而不可以謂無瑕矣」とする所に自負のほどを見ることができる。本草大義は鉱石・草木について、図解を示し、漢異名・和名を挙げて博物学的解説を加えたもの。本草補苴は大義著述後参看した府県志類によって範囲を拡大し、ほぼ同様な方法で記述したもの。本草図翼は同様の事項につき図解を主としたもの。本草或問は若干の事項について考証を試みたもので、その凡例に「凡此書乃所以正於本草綱目所載之諸家注解之誤謬也」とその意図を述べている。食物知新は食療本草系のものとして著述されたが、それらの書にほとんど説き及ばなかった魚類について、従来の著で採用してきた、図解を加えながら解説するという方法論のもとに著述したのが日東魚譜であり、本草大義の自序に、「東方乃魚塩之地也魚塩之医夫治二魚塩之民一不レ可三以無二此書一焉」とその意義を述べている。元文六年本の日東魚譜では鱸魚について鈴好きの略という語源説を述べ、時珍の「長僅数寸」説を挙げ、朱氏談綺を悪用して「朱舜水曰鱸魚和漢無レ異」と事実無根の説を挙げ、産地に触れ、ついで気味・主治に及ぶ⑩。玄泉の姿勢はまだ医学的であって、博物学的態勢はまだ整っていない。朱氏談綺のごとき示唆に富んだ書に接しながら、これを十分に消化しえなかった。若水のごとく博覧によって時珍を否定する所にも至っていない。当時の江戸の市井学者のある姿勢・水準を示すものと言えよう。

庶物類纂続編の編纂のよき余波として、物産学が興隆し、宝暦頃から物産会が各地で開催され、つづいて事物考証を中心とする名物学が勃興する。その頃江戸には、京都系の若水門松岡玄達のほか、江戸系の阿部将翁門下の田村藍水、更にその門下の田村西湖・栗本丹州・平賀鳩渓・曽占春・後藤光生などのすぐれた学者が輩出したし、一方また松岡玄達が東下したあと、京都の本草学の中心者となった近世後期最大の本草学者小野蘭山がまた官命によって東下するということが起きた。こうして文芸・諸学等の諸部門同様に、本草学においても中心は次第に東漸する傾向にあった。

将翁に始まり田村藍水に引きつがれた江戸学派は実用主義的傾向を持つとされる⑪。そういう学派的傾向の中にも、個々の学者により自ら小異もあり、専攻分野・学的傾向等を異にするものも生じる。将翁・藍水は旧来のごとく草木中心であり、薬学的研究を目的とする。その門下生は、そのような要請は一方に持ちながら、姿勢は遙かに博物学的である。藍水の長子西湖は若干分野が広く、豆州諸島産物図説では動物類にも説き及んでいるが、魚類にはさして強くない。藍水の次子栗本丹州は動物類の著が多く、魚類については皇和魚譜・丹州魚譜・丹州魚貝譜等の著がある。いずれも魚図を重視し、解説は二次的価値を与えられているの感がある。魚図は日東魚譜よりも遙かに精緻である。それは日東魚譜がその大体を示唆すれば足りると考えたろうのに対し、これは魚図に博物学的解説を托したからであろうし、そこに斯学の深まりを感じる。このことは単に丹州の諸著に限らず以後の各種の著書についても妥当することである。鱸魚については、皇和魚譜に若水説を卓説として挙げてある

ことは既述した。他の二書には記述がない。平賀鳩渓は西洋生物学をかなり高度に消化しえた本草学者であったが、物類品隲（宝暦十三年刊、六巻）には鱸魚の記事はない。曽占春は藍水門では最も著書の多い学者であり、成形図説百巻・国史草木昆虫攷十三巻など不朽の書を持ち、魚類に関するものでは本草綱目纂疏十五巻（三巻まで刊行）・占春斎魚品等がある、纂疏では舜水説を引用し、「朱舜水云鱸魚和漢無異」とし松魚鱸魚三種の記事を挙げ、玄達同様陏大業志を引用し、「小者曰世比呉稍大者曰不都古此舜水所云紫腮鱸也其大者即須受幾也」と成長名を挙げ、次に産地を挙げ、更に「有一種呼洋鱸者一名海鱸一名安良此似鱸濶口味粗大者至百余斤」と同科異種と考えたアラを挙げる。アラを挙げる所に特色がある。その他は従来の説を出るものではない。折角の舜水説のヒントを理解できなかったのである。占春斎魚品（文化六年序）は中国書の考証を主とするもので、定海県志・舜水説・揚延季詩・陏大業志・清一統志・海塩県図経・海錯疏・四明謗等を引用するが、それらの記事間の異同に引廻わされ、それらの批判も十分でなく、更には、わがスズキに好都合な記事を選んだ感じで、十分に科学的であるとは言えない。その点むしろ彼の弟子でその考証的傾向を発展させた高木春山の方に見るべきものがある。同じく藍水門の後藤光生には本草綱目補物品目録（享保十三年序、二巻）・同後編がある。本草綱目に記載のない物品についてのわが国の諸学者の説を略記したもので、綱目補とするところに、わが学的水準とその意気込みを知ることができる。なお鱸魚は綱目に載るため、この両書には載らない。光生には外に随観写真三十巻・本草綱目会読筌十三巻など関連書があるが未見。なお光生には本草関係書が多かったが、散佚して多くは所在不明である。

中国の鱸魚を真に正しく弁別しえたのは曽占春の弟子高木春山であり、春山魚譜である。あるいはこの書のみであると言ってよいかもしれない。春山は町人の出で、諸侯の用達を務めるのを家業とするものであったが[12]その彼が、すべての官医・本草学者が軽卒に看過してきたことを鋭く見ぬいて堂々たる所論をはいたことはきわめて興味の深いことである。その鱸魚の項に、「須々支はかしこの鱸魚なるに疑なきなれどまたその同名異物ある事を知ってよに惑ふこと無かるべし」と説き始め、寧波府志・三才図会の記事を舜水談綺の記述とつき合せ、更に事言要言・江南魚鮮品の記事を裏書きにして、「松江の鱸魚はことなる名物にていと希なる物なれど」とし、時珍の鱸は四腮鱸でスズキではなく、皇和魚譜に載せる琵琶湖のダウマンであろうとする[13]。実はこの四鰓魚は、カジカ科に属し、わがゴリに近い小魚なのである[14]。そのようなことを春山が正しく弁別しえたのは、彼の漢籍に対する読解力の深さもさることながら（春山の使用する文献の多くは、若水もすでに使用している）、魚類の魚体上の特質に関する博物学的知識が、当時の本草学者一般よりも格段にぬきんでていたことによるものであろう。春山の博物学的知識の深さ、精確さは本草図説（巻二一～巻一九七）における精緻な図解によって十分にうかがいうる。わがスズキについてはセイゴ二種（黒点のあるものとないもの）・フッコ・スズキの四種の精緻きわまる魚図がある。一枚の鱗といえどもおろそかにせぬ精確さで書きとおしている。その目が文献の解釈に自ら生き、舜水談綺も正しく理解し、ひいては中国文献における同名異魚を正しく弁別する基本的能力となったのであろう。

魚鑑（天保二年刊、二巻）の著者武井周作は蘭学を修め本草に通じた人で、啓蒙的意味をも含めてこの書を著わした。すずきに鱸魚を充て、セイゴ、フッコの江戸の成長名、雲州のチウハンの名を挙げるが、松江のスズキを四腮魚にあてる程度の解説である。ただ類魚のシマス一にモフッコを挙げる。気味・主治を附記する点なお本草的である。

江戸の市井の魚類学者奥倉辰行ともなると、全く姿勢が違ってくる。本草的研究という態度はすでになく、全くの博物学的見地から図解と解説とを施していく。辰行は神田の菜果商で、幼より絵をよくし、狩谷掖斎のすすめに従って魚類の写生と研究とに没頭し、その写生は精緻をきわめた。その著には鯛類のみについてまとめた水族写真（安政四年刊、三巻）と、各種の魚類について図解し解説を添えた水族四帖（稿本、国立国会図書館蔵、四巻）などが知られている。前者には鱸魚の事はないが、後者にはわがスズキについて図解と解説とを加えてある。

江戸で藍水門の右の人々が活躍していた少し前に、京都では小野蘭山が享保六年に官命によって東下した松岡玄達のあとをうけて、京都学派の重鎮の地位を占めていた。もっともその蘭山も寛政十一年には東下して医学館で本草を講じることになる。蘭山の説は大和本草・物品目録・巻懐食鏡・詩経名物弁解・本草綱目・秘伝花鏡・救荒本草・爾雅等の講義聞書の形で多く残り、採薬記・魚譜・詩経産物解等の著も多い。最大の著書は本草綱目啓蒙四八巻である。鱸魚については安永四年の珍綱解説以来スズキ説を取り、ほとんど疑念をはさんでいない。[1][10]啓蒙は成長名が多いので、その意味での語史的価値が大きい。蘭山先生鑒定時珍食物本草目訳（東洋文庫蔵）も「鱸魚（スゞキ）」とする。蘭山門下および同系の本草学者の説はいずれも蘭山の説を出ない。たとえば蒹葭堂補正本草綱目記聞・物部寿斉記聞・魚譜（小原桃洞）などがそれである。蘭山没後の京都学派の中心は山本亡羊で、主著格致類篇一二五巻追加二巻は名物学的著述で、若水の庶物類篇に類似する。鱸魚はスズキ説で、資料的にも若水の蘭山を多く出るものでない。いずれにしても亡羊の学問的傾向は名物学的傾向へと後退し、その傾向は山本家の代々にもひきつがれ、またそこで育った学者たちの多くは、かっての清新の気風のみちた京都の反官学的気風を全く失い、保守的な・新風に乏しいものになりはてた。蘭山門でも古医方派に属する紀州の小原桃洞には見るべき見解が多い。ただ鱸魚では、魚譜にも本草余纂にも特に見るべき説がない。桃洞の弟子畔田翠山には著書が多いが、名物学的傾向が強く、諸説の集大成としての功績は大きいが、とくに見るべき新見解に乏しい。綱目註疏四八巻・水族志十巻・古名録八五巻等しかりである。幕末に近づくにつれ、この部面でも学問の中心は明らかに江戸に移り、新風は絶えず東から吹いてくるようになったのである。

注1　「翰入洛、因見秋風起、乃思呉中菰菜蓴羹鱸魚鱠曰、人生貴、得適志何能、羈宦数千里以要名爵乎、遂命駕而帰」（晋書張翰伝）。
「呉都献松江鱸魚、煬帝曰、所謂金齏玉鱠、東南之佳味也」（烟花記）。
「鱸魚唐ニテハ松江ノモノヲ上品トス、日本ニテハ雲州松江ヘマツエノモノヲ上品トス、松江ハ湖水ナリ、冬十月比ヨリ塩海ヘ出ズ、其所ヲ取ル、松江ノ名産、和漢符合ス、甚奇ナリ」（珍綱解説、安永四年、石田筆記）

2　談苑松江鱸魚長橋南所出者四鰓天生鱠材也味美肉緊切終日色不変橋北近崑山大江入海所出者三鰓味帯鹹肉稍慢迴不及松江所出

3　田中茂穂・原色日本魚類図鑑にはこうある。「スズキ又はススキ（一般の称呼）。東京では小さい時をセエゴ、稍や長じてフッコと云ひ成長したものをスズキと云ふ。…鱗は稍や小さい櫛鱗で、一縦列の鱗数は百五個である。下顎は上顎よりも稍や前方へ突出し、口裂も大きく…体色は青味強く、不明瞭な黒褐色の斑点を散在して居る。此色点は地方によっても、個体によっても相違があって、九州西岸、朝鮮などに居るものは頗る明瞭且つ大きい。…日本から朝鮮、中華民国へも分布して居る。体長は一メートル余、体量二貫に達する。主に海のものであるが、海岸附近に居るもので、利根川などでは潮入の処よりも遙に上流へ溯ることもある」　また蒲原稔治・原色日本魚類図鑑には、「幼時は春夏には淡水に上って生活し、秋冬に海に入り、三四年で六〇cmとなって成熟する。夏特に美味」とある。

4　閲甫曰寸寸幾用鱸字而順和名集雑山子多識共其訓同然詳本草所説四五月出長僅数寸状類似鱖而色白有黒点巨口細鱗有四鰓又普張翰秋風起思松江鱸魚鱠以此等考之則今俗間謂寸々幾者非鱸魚也鱸魚皆言有小毒今謂寸々幾者非有毒者憶鱸魚俗間謂保天者略似凡俗間謂和名不審者甚多以状性味合之順和名集訓考之則百一無有髣髴者何也仮令以鱸魚訓寸々幾寸々幾即鱸魚之訓憶振古如此不誤後世寸間誤以寸々幾訓他物矣然則但以和名言其性則太違学者夫審之

5　魚類の成長名は渋沢敬三・日本魚名の研究に精しい。現在のスズキの成長名について、内田恵太郎・さかな異名抄（昭和四十一年、朝日新聞社）より引用すれば、次のごとくである。「東京附近ではフッコ（五センチ）コッパまたはデキ（一〇センチ）セイゴ・セエゴ（二五センチ）フッコ（三五センチ、大小の意味がある）スズキ（約五〇センチ以上の成魚）オオタロウ（一メートルにもなる老大魚）。東海地方ではセイゴ（二五センチ）マタカア（四五センチ）オオマタ・コチウ・チウイオ・オオチウを経て老大のオオモノとなる。北陸ではメイゴ（一五センチ）ハネ・ハネゴ（三〇センチ）スズキ（成魚）ユウドウ（老大）。瀬戸内、山陽中部ではセイゴ（一〇センチ）セイ（二〇センチ）コバネ・ハネ（三〇センチ）スズキ（成魚）。九州北部ではセイゴ（二〇センチ）ハネゼ（二五センチ）ハクラ（三〇センチ）ススギ（成魚）。山陰ではチウハン・アンザン（三〇センチ内外）。

6　東南江海四時倶出小者数寸大者三五尺巨口細鱗似鱈而白質黒章頭大鰭硬有四鰓而大開或有黒点亦間有之川河者味美脂多江海者味浅脂少今洛之淀宇治為上品播紀泉勢尾参遠駿豆相江都房総等州最盛洛西北海亦雖有之不及東南之美也但雲州松江多出味亦称美松江之名擬呉松江以号之耶

7　鱸魚　スヾキ　松江ノ鱸魚ニ三種アリ第一ハ紫鰓鱸魚腮ハアギト∨ミナ紫色ニシテ味甚甘美ナリ長六七寸許リ　第二ハ四鰓鱸魚長八九寸一尺許リ味次之　第三長三四尺日本ノ鱸魚ト同シ（舜水朱子談綺）

鱸魚海中四腮鱸皮緊脆而肉厚呼脆鱸有江鱸差小而両腮味淡有塘鱸形雖巨而不脆（寧波府志）　有四腮者皮脆而肉厚名脆鱸有江鱸差小而腮味淡又有塘鱸形雖巨而不脆（三才図会）なども朱子談綺に近い。

8　謹按後漢書左慈伝云左滋字元放廬江人也少有神道嘗在司空曹操坐操従容顧衆賓曰今日高会珍饈略備所少呉松江鱸魚耳慈於下坐応曰此可得也因求銅盤貯水以竹竿餌釣於盤中須臾引一鱸魚出操大悦挙笑会者皆驚操曰一魚不周坐席可煩得乎慈乃丐之餌釣沉之須臾復引出皆長三尺余生鮮可愛操使目前鱠之周洽会者観此則明是松江鱸有三尺以上者也李時珍特拠其所見之小者而言耳

9　これらの本草書の著述年代は国会図書館の白井文庫本による。これ

らの著述順序はこの序の年代順ではないらしい。というのは、本草補甚の序に、「曩者不佞著本草大義若干巻」とあり、また本草図翼の序にはすでに本草大義十余巻と本草補甚十余巻を著わしたと述べる。本草大義の白井本は改定本なのであろう。

10 朱舜水曰鱸魚和漢無異但淞江鱸魚有三種曰紫鱸長僅六七寸甚美味也曰四鰓鱸長八九寸味不及紫鰓者倭国海産鱸魚味劣河産四鰓魚ハ朱氏談記ソ此邦亦有河海之産雲州松江武州小松川相州相模川並有之大小不一也　なお注7参照。

11 明治前日本生物学史第一巻二八二P。

12 同書四四八P。

13 須々支はかしこにいふ所の鱸魚なるに疑なきなれどまたその同名異物ある事を知りてよに惑ふこと無かるべしそは寧波府志に海中四腮鱸皮緊脆而肉厚呼曰脆鱸、有江鱸、差小而両腮、味淡、有塘鱸形雖巨、而不能といへりこの文を三才図会にとりて、寧波府志鱸魚巨口細鱗、身有黒点、作鮓最良、隋唐佳話、呉郡献松江鱸鱠、煬帝曰、此所謂金齏玉膾東南之佳味也、有四腮者皮脆而肉厚、名脆鱸、有江鱸差小而両腮味淡、又有塘鱸形雖巨而不脆といへり舜水談綺に…といへるは大かた合へり事言要言に談苑…といひ、江南魚鮮品に有鱸魚巨口細鱗、味甚腴、長至二三尺者、又有菜花小鱸、僅長四寸而四腮、産松江蘇子所謂松江鱸魚也といへるにてもその同名異物ある事を知るべしそが中に鱸魚を巨口細鱗といひたれど巨口細鱗はなほ菜花小鱸の方なりさるは松江の鱸魚はことなる名物にていと希なる物なれど文人の筆を下すに大率実験を務めずして前文を踏襲しゆくが多かれば鱸魚とだに言へば直に巨口細鱗と書くなれど須々支はしか巨口なる物にはあらず正字通に鱸力吾切音盧、巨口細鱗似鱖、長数寸有四腮、俗呼四腮魚、以七八月出松江尤盛、続韻府天下之鱸皆両腮、惟松江鱸四腮、とありていと希なる物なり」閩中海錯疏に、鱸類鱖、肉肥味厚而二腮といへるは二品を錯記せるにて二腮はスゞキの方なりしかして下文に按鱸江淮広浙在在有之、呉淞別有一種、円而短小、巨口細鱗四腮、淞江呼為四腮鱸といへるにてもとより別物なる事を思ふべし」本草綱目に時珍曰、黒色曰盧、此魚白質黒章、故名、淞人名四腮魚といへるを見れば色黒きに因りて盧に従ひたるなれされはスゞキは鱸の本義にはあらずさるはスゞキも黒章の者あれどさばかりに黒きはなし」しかしてその集解に時珍曰鱸出…東南佳味也とありこの文正しく四腮鱸の方にしてスズキにあらず」かくてこの四腮鱸は皇和魚譜一に載せたるダウマンなりそは同書チ、カブリ鯆魚条に又琵琶湖ニ一種ダウマント呼ブアリ形相似テ黒褐色ニシテ細鱗アリ大ナルハ五六寸ニ至ル先輩杜父魚ニ充ツ非ナリコレ鯆魚ノ類ニテ尤大ナル者ナリといへる物白質黒章なり」後にはその同類なるハゼをも偽りて鱸と言ひて売れりそは湘南楽府に淞南好人物笑同情、六跪蟹螺通蝸族、四腮蝦虎冒鱸名、不用甚分明とありてその自注に魚之食蝦者、本称蝦虎、市者美其名曰四腮鱸といへるにて同類なる事しらる」三才図会にその説く所の脆鱸江鱸塘鱸を図せし中にその四腮なる脆鱸は口傍にやゝ稜角ありてカワヨコゼは杜父魚なれどその大にしてダウマンにまがふばかりなるは鰕なりそは澱園居士魚品に有鰕巨口細鱗、蘇子所謂状似松江之鱸者也、鬆利如錐、肉緊而無刺、類蟹螯といへる物なり」和名鈔十九に鱸ハスゝキソ崔禹錫食経云鱸ハ音盧和名須々木ソ貌似鯉而鰓大開者也、四声字苑云似鱖而大青色といへるもスゞキの上にはあらず又その似鯉とあるは似鱸鯉とあるを脱せるなりそは事物異名録に鱸鯉演繁露、呉興人名土附魚為鱸鯉、似其質円而長、黒斑相似而其鱗斑駁、又似鱸魚、故両喩而兼言之といへるを見るべしこは皆こゝにいへるスゝキのさたにはあらず」こゝにいへるスゞキは鱸魚とも言ひまた塘鱸ともいふ左慈が釣りたりといへるは確ならねどこゝのスゞキと見ゆまた陳仁業志に呉都…玉鱠といへるはなほスゞキなり」本朝食鑑に…といへるは全く

本草綱目に依傍して記せるにて似鱈の句の外はスゞキに切ならず又稀に黒点ある者もあれど盧と名に負ふばかりの黒章はあらず本草啓蒙の文はなほこれに因りて変じたるなればなほ実物に遠し」…

14 井坂錦江、東亜物産史の「鱸」に次のように載る。「我国ではスズキに充てゝあるが、これはカジカ科に属する四鰓魚スヂカギカジカ、又はヤマノカミであって、我国のゴリに近い小魚である。本草綱目に…長さは五六寸、体は円味を帯び、頭大きくして骨ばり、褐色で腹が白く、鰓蓋が外に現はれて四条の紅黄色の皺膜を有する。…地方誌では江蘇・浙江・江西等が産地となってゐる。我国にも各地に棲んでゐるが、極めて少ないものであるといふ。猶はスズキも支那の海産魚であるが、溯河してかなり上流で取れる。これも鱸と云ひ、又の名を玉花鱸と云ふ。幼魚の体側に黒点があるのでかく呼ばれるのである。」

15 下総絹川セイゴスゞキ利根川ヨリ上リ来ル大ササケホドアリ甚踊ル…セイゴ身白身睚下方赤肉アル者形イサキニ似タリ黒点アル者睚金色多シ腹下平脞肉多金光ノ方睚ニ金色少シ腹豊脞肉少シ 壱岐海浅処スゝキ居ル 凡テ魚風ヲ忌ムタゞ風ヲ喜ブハスゞキナリ 尾州ニテスゞキヲセイト云 伊勢セイコ大者マダカト云 シマズ七八寸ヨリ尺余ニ至ル者黒クシテ形スゝキノ如シ シマズモフツコト云状スゞキニ似テ頭少ク扁シ アイコ藻汐草 セイゴヨリフツコマテ黒斑アリスゞキトナレバ斑薄シ芸州夏河ニ上リテ冬ニ海ニアリ砂小石ニアリ海ニトル者背ニ黒点アリ釣ニテトル夏ヲ上トス大三尺斗リ 物品マダカスゝキノ二年三年ヲマタカト云四年ヲスゞキト云物品シナゴスゝキノ初生ヲ云同大ナル者ヲセクロト云 モフコ大ナル者二尺ニ至形スゝキニ似テ扁ク広クハシ尖ラス口モ小ナリ鱗細ナリ味劣ル全身脆軟ナリスゞキヨリクサレ安シスゞキトモフツコトハマダヒトハナヲレダヒノ如シ スゝキ性強ク之佇ニ水ウゴカザレバ死ス夏ハ黒点見レトモ冬ハ見エス サスマススゞキハイツレモ跳テ餌ヲ食フ共ニ蛇ヲ食スゞキハ血ヲアラサゞルカ和漢三才図会…

16 「海河ノ二種アリ各大ニナルモノナリ四五尺ニモ至ルアリ又鱸ノ小ニシテ六七寸許ナルヲセイゴト云セイゴ漢名鱸魚〈魚品〉ト云一説セイゴハ長ゼヌモノナリト云一種ノ魚ニシテ鱸魚ノ小ナルモノナルニ非スト云何魚ナル事ヲ知ラズ海人ニ問フベシ…」(安永四年、珍網解説)

「鱸 ワタヲ蜘腹〈クモワタ〉ト云(巻懐食鑑記聞)「鱸魚スゞキ」(蘭山先生鑒定時珍食物本草目訳) 「コノ魚大小ノ名諸州各異ナリ筑前ニテハ六七寸ナルヲセイゴト云稍大ナルヲハネゼト云一尺内外ヲハクラト云讃州ニテハ六七寸ナルヲセイゴト云或ハセイト云一尺余ナルヲコバネト云雲州ニテハ一尺許ナルヲチウハント云伯州ニテハアンザシト云水戸ニテハセツパト云一尺ニ過ルモノヲスゞキト云備前ニテハ三四寸ナルヲセイゴト云七寸許ナルヲセイト云一尺許ナルヲコバネト云芸州ニテハ四五寸マデヲセイゴト云一尺五寸ナルヲマダカト云マダカヨリ大ナルヲスゞキト云同国桑名ニテハ八寸許ナルヲセイゴト云一尺二寸許ナルヲマダカト云二尺ニ近キモノヲハネト云二尺以上ヲスゞキト云江戸ニテハ一年ヲセイゴト云二年ヲフツコト云三年ヲスゞキト云濃州ニテハ一年〈二寸許〉ヲシイノハト云二年〈六寸許〉ヲセイゴト云三年ヲマダカト云四年ヲスゞキト云」(本草綱目啓蒙)

会費納入についてのお願い

昭和四十二年度より年額六百円に値上げになりました。機関誌発行の基金になりますから、未納の方は、振替神戸六六二二番神戸大学文学部国語国文学会へ払込み下さい。